

お雪は大層よい嫁である事が分った。巳之吉の母が死ぬようになった時——五年ばかりの後——彼女の最後の言葉は、彼女の嫁に対する愛情と賞賛の言葉であつた、——そしてお雪は巳之吉に男女十人の子供を生んだ、——皆綺麗な子供で色が非常に白かつた。

田舎の人々はお雪を、生れつき自分等と違つた不思議な人と考えた。大概の農夫の女は早く年を取る、しかしお雪は十人の子供の母となつたあとでも、始めて村へ来た日と同じように若くて、みずみずしく見えた。

ある晩子供等が寝たあとで、お雪は行燈の光で針仕事をしていた。そして巳之吉は彼女を見つめながら云つた、——

『お前がそうして顔にあかりを受けて、針仕事をしているのを見ると、わしが十八の少年の時遇つた不思議な事が思い出される。わしはその時、今のお前のように綺麗なそして色白な人を見た。全く、その女はお前にそっくりだったよ』……

仕事から眼を上げないで、お雪は答えた、——

『その人の話をしてちょうだい。……どこでおあいになつたの』

そこで巳之吉は渡し守の小屋で過ごした恐ろしい夜の事を彼女に話した、——そして、にこにこしてささやきながら、自分の上に屈んだ白い女の事、——それから、茂作老人の物も云わずに死んだ事。そして彼は云つた、——

『眠っている時にでも起きている時にでも、お前のように綺麗な人を見たのはその時だけだ。もちろんそれは人間じゃなかった。そしてわしはその女が恐ろしかった、——大変恐ろしかった、——がその女は大変白かつた。……實際わしが見たのは夢であつたかそれとも雪女であつたか、分らないでいる』……

お雪は縫物を投げ捨てて立ち上つて巳之吉の坐っている処で、彼の上に屈んで、彼の顔に向つて叫んだ、——

『それは私、私、私でした。……それは雪でした。そしてその時あなたが、その事を一言でも云つたら、私はあなたを殺すと云いました。……そこに眠っている子供等がいなかったら、今すぐあなたを殺すのでした。でも今あなたは子供等を大事に大事になさる方がいい、もし子供等があなたに不平を云うべき理由でもあつたら、私はそれ相当にあなたを扱うつもりだから』……

彼女が叫んでいる最中、彼女の声は細くなつて行つた、風の叫びのように、——それから彼女は輝いた白い霞となつて屋根の棟木の方へ上つて、それから煙出しの穴を通してふるえながら出て行つた。……もう再び彼女は見られなかった。